

主題省略の再生メカニズムにおける 日本人と外国人日本語学習者の相違

平 川 八 尋

0. はじめに

他言語と比較して日本語では省略が頻繁に行なわれると言われている。三上 章 (1970) は、日本語と英語を比較し、「英語の文は一文一文がだいたい自足的 (self-sufficient) である。日本語の文はそうではない。いわゆる省略が多い。日本語は、文脈依存、場面依存の高い言語である。」と述べている。

省略と言っても色々なものがある。たとえば助詞、動詞句、名詞句の省略等様々である。本稿では省略の中でも主題省略をとりあげ、日本人と外国人日本語学習者が何を手がかりにして省略された主題を再生しているかを考察することを目的とする。ネイティブスピーカーとしての日本人と、外国語として日本語を理解する外国人日本語学習者を対象に行った調査をもとに、省略された主題を再生するメカニズムの相違を明らかにしてみたい。

本論に入る前に主題省略について触れておく。久野 (1973) では次のような例文を挙げ、いわゆる主語省略と言われるものが、「ガ」の省略ではなく「ハ」の省略であり、主題省略であることを述べている。

a. 僕が生キテイルウチハ、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{僕ハ} \\ *\text{僕ガ} \\ \phi \end{array} \right\}$ 彼ニソソナコトヲサセナイ。

b. 僕が生キテイルウチハ、 $\left\{ \begin{array}{l} ??\text{僕ハ} \\ \text{僕ガ} \\ ??\phi \end{array} \right\}$ コノ会社ノボスダ。

aでは主文の主語として「僕ハ」を用いることはできるが、「僕ガ」を用いることはできない。又「 ϕ 」によって示されているように、主語を完全に省略することができる。bでは「僕ガ」が文脈にもっとも適する主語で「僕ハ」を用いると少し不自然な文となる。そして主語を省略すると「僕ハ」を省略した時のようにやはり不自然になるとし、「主文の主語としての『名詞句+ガ』は省略することができない。主語が省略されている文は、すべて『名詞句+ハ』(すなわち主題)の省略に由来する。」ことを主張している。本稿では、この久野の意見を支持し、いわゆる主語省略と呼ばれているものを主題省略と呼ぶことにする。

1. 質 問 文

久野 (1973, 1978) の例文から質問文を作成した (一部地名、表現に手を加えてある)。

質問文は、久野によって形式化された主題省略文のすべての類型を網羅するように配慮した。以下に形式ごとに質問文を挙げる。

[連用接続での省略]

(1) 太郎が上着を脱ぎ、[φ]ハンガーに掛けた。

〔「て」接続での省略〕

(2) 太郎が上着を脱いで、[φ]ハンガーに掛けた。

〔「と」接続での省略〕

(3) 太郎が上着を脱ぐと、[φ]ハンガーに掛けた。

[従属文の主語の省略]

(4) [φ]この前来たとき、太郎は新しいスーツを来ていた。

(5) [φ]病気なのに、太郎は学校を休もうとしない。

[話し手に視点がおかれた主題省略]

(6) 太郎が僕に会いにきたけれども、[φ]会ってやらなかった。

(7) 太郎が僕の家をやってきた。[φ]運悪く外出中で、会えなかった。

〔「は」のピリオド越え:「Xハ……。Xハ……。」の第二文の「Xハ」の省略〕

(8) 太郎は花子の部屋に入らなかった。[φ]隣の部屋に入った。

(9) 私は議論をして、勝ったことがない。[φ]必ず負けるのである。

[主語を先行詞とする主題省略:「Xガ……。Xハ……。」の「Xハ」の省略]

(10) 太郎が訪ねてきた。[φ]すっかり大人っぽくなっていった。

(11) 今日は太郎君が欠席だった。[φ]風邪をひいて寝込んでしまったらしい。

[新主題省略:「Yガ……。X……。Xハ……。」の「Xハ」の省略]

(12) 太郎が僕に話しかけてきた。

 だけど、[φ]知らん顔をして、返事をしてやらなかった。

(13) 太郎が僕に自転車を貸してくれた。

 お礼に、[φ]夕食をごちそうした。

[異主題省略:「Yハ……。X……。Xハ……。」の「Xハ」の省略]

(14) 太郎は花子を病院に見舞いに行った。

 [φ]思ったより元気だった。

(15) 筑波センターで花子とあった。

 [φ]数ヶ月会わないうちに、ずいぶんきれいになっていた。

(※ [φ] は調査用紙の質問文には挿入されていない)

2. 調査方法

回答者は各文において省略されている主題が何であるかを選択肢の中から選ぶ。さらに回答者が、どの程度自信をもって回答したかを調べるために、1～5までのスケールを設け、特に外国人が回答に対してのどれくらいの確信度をもって回答しているかが分かるようにした。また、回答として「誰か他の人」を選択した場合はその具体的な例を記入してもらうことにした。以下に質問紙上の指示と例を示す。

以下の質問は日本語の話し言葉における省略に関するアンケートです。気楽に答えて下さい。答え方は、あなたの正しいと思われるもの“すべて”を{ }の中から選び、自信のあるもの(5)から、自信のないもの(1)までの数字に、それぞれマルをつけて下さい。尚、『誰か他の人』を選んだときは、()のなかに具体的にその人を例としてあげて下さい。

例：太郎と僕は、西武で買い物をした。

Q. 買い物をしたのは誰ですか。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{太郎} \\ \text{私(話し手)} \\ \text{誰か他の人} \\ \text{()} \end{array} \right.$	⑤ 4 3 2 1	自信がある <u>5 4 3 2 1</u> 自信がない “誰か他の人”とは、太郎でもなく、私(話し手)でもない第三者を意味します。
	⑤ 4 3 2 1	
	5 4 3 2 1	
	()	

以上の指示と例文を読んだ後、質問文に回答してもらった(注1)。

3. 考 察

日本人と外国人が省略主題再生の際、何を手がかりにしているかを中心に問題の考察をすすめたい。省略を再生する際、何を手がかりにしているかを知るには外国人の質問文への正解率が役に立つと言える。何故なら特に低い正解率の質問文では、日本人が再生の手がかりとしている手段を外国人が見落としていることが予想され、日本人と外国人の再生の差の発見への重要な手がかりを与えてくれるからである。

正解率の算出には、外国人日本語学習者への調査を実施する以前に行った日本人への調査結果を参考にしている(注2)。そこで得た結果から外国人学習者への質問文の正解を作り、その正解に基づき採点をし、各質問文に対しての正解率を算出した。また正解率の低いものから高いものまでを並べ順序づけ、その順序づけを難易度とし分析を試みた。分析結果から再生の手がかりと密接にかかわる3点が発見された。まず第1は接続度の問題であり、第2に視点補助動詞、第3に結束性の問題である(注3)。

、それではこれら3点に関して論議を深めてゆきたい。

3-1. 連用接続/「て」接続/「と」接続に関して日本人と外国人日本語学習者の比較

次の質問文への回答で、日本人と日本語学習者との主題省略に関し解釈の大きな相違が観察された。

(3) 太郎が上着を脱ぐと、「φ」ハンガーに掛けた。

省略されている主題 回答者	太郎	私	誰か他の人
日 本 人	56%	69%	75%
外 国 人	84%	12%	12%

(% は被験者数全体に対しての回答数の割合を示す)

他の問題に比べ、「～と」接続の主題省略文は日本人と外国人との回答がもっとも異なる

っていた。また学習者が「と」接続・連用接続・「て」接続を区別せずに理解していることも回答数から推測される。実際に回答数を比較してみよう。

〔外国人の回答数〕

省略されている主題 接続法	太郎	私	誰か 他の人	
連用接続	44	6	7	(太郎が上着を脱ぎ、ハンガーに掛けた。)
「て」接続	45	6	0	(太郎が上着を脱いで、ハンガーに掛けた。)
「と」接続	42	6	6	(太郎が上着を脱ぐと、ハンガーに掛けた。)

それに対して日本人は、以上の3接続を、明らかに区別していることがわかる。以下の数字を参照されたい。

〔日本人の回答数〕

省略されている主題 接続法	太郎	私	誰か 他の人	
連用接続	48	13	11	(太郎が上着を脱ぎ、ハンガーに掛けた。)
「て」接続	48	3	3	(太郎が上着を脱いで、ハンガーに掛けた。)
「と」接続	27	33	36	(太郎が上着を脱ぐと、ハンガーに掛けた。)

「て」接続に関しては「太郎」に集中しているが、連用接続では「私」「誰か他の人」を選択する者が増え、「と」接続にいたっては「誰か他の人」が「太郎」の数を上回っている。連用接続と「て」接続では省略主題として「太郎」がもっとも自然な回答であり、「と」接続では「太郎」でも「私」でも「誰か他の人」でもよいということになる。

この点に関して久野（1973）は次の様に説明している。

- (25) a. 太郎が上着ヲ脱ぎ／イデ、ハンガーニ掛ケタ。
b. 太郎が上着ヲ脱グト、ハンガーニ掛ケタ。

ここで問題にするのは、『ハンガーニカケタ』の主語が誰であるか、ということである。(25a)においては、その主語は、太郎でなければならないが、(25b)では太郎であっても、他の誰か（今話題になっている人物）であってもよいようである。これは『上着ヲ脱ぎ／イデハンガーニカケタ』が単一の構成要素（すなわち述部）を形成し主語『太郎ガ』の統語力が、義務的に『ハンガーニカケタ』にも及んでいるのに対して、『上着ヲ脱グト、ハンガーニカケタ』が単一の構成要素を形成せず『上着ヲ脱グト』と『ハンガーニカケタ』という二つの構成要素から成り立っているためらしい。

久野は連用接続と「て」接続を同等に扱っているが、今回の調査では「て」接続の回答のほうがより「太郎」に集中し、連用接続が「太郎」以外の「私」「誰か他の人」に分散していることが観察された。しかしこの問題は今回の調査の目的ではないのでこれ以上言及しない。

ここまで述べてきたことをまとめると、外国人は構文法に強く影響された主題省略を正

「(太郎は) すっかり大人っぽくなっていた」となる。日本人はこれらの視点のかかり方を重要な手がかりとして省略主題を再生していると言えるが、外国人が再生するには十分視点性を活用できずに主題を再生していることが正解率の低さから伺える。

視点補助動詞と省略主題再生のてがかかりとの関係についてまとめてみる。視点補助動詞は主題化に強い影響を与える。視点補助動詞の影響により主題化されたものが、その後続く文において省略をうけたばあい、日本人は主題を適切に判断できるのに対して、誤った省略主題を再生した外国人は、視点のかかり方を無視したか、または誤って理解しまったといえる。いずれにせよ、視点補助動詞を含んだ質問文の正解率が、含まない質問文よりも低いことは、視点補助動詞の主題省略へ与える影響を外国人が十分に理解できていないと言えるだろう。

3-3. 結 束 性

次に考察する質問文は正解率が高く、接続法や視点補助動詞の影響を受けていないものである。

- | | |
|---|---------|
| (1) 太郎が上着を脱ぎ、[φ]ハンガーに掛けた。 | 正解率 88% |
| (2) 太郎が上着を脱いで、[φ]ハンガーに掛けた。 | 正解率 90% |
| (15) 筑波センターで花子とあった。
数ヶ月会わないうちに、[φ]ずいぶんきれいになっていた。 | 正解率 90% |
| (11) 今日は太郎君が次席だった。
[φ]風邪をひいて寝込んでしまったらしい。 | 正解率 92% |
| (8) 太郎は花子の部屋に入らなかった。[φ]隣の部屋に入った。 | 正解率 94% |
| (5) [φ]病気なのに、太郎は学校を休もうとしない。 | 正解率 96% |

(1)、(2)は「脱ぐ」という動作から「掛ける」という動作へ時間の連鎖があり、主節、従属節の結束性に強さがある。「上着を脱ぐ」とこと「ハンガーに掛ける」ことは習慣的動作であり、我々の常識として頭の中にストックされている。特別な文脈がないかぎり、「太郎」が省略主題であると解釈されるはずである。

(2)の正解率と同じ(15)では、「きれいになった」と前文の「花子」が強い語彙的結束力をもっている。「きれいになる」のは男性ではなく女性か、その他空間(部屋、広場等)が主語になることが必要条件である。しかし前文から「花子」という人物が話題にのぼり主題化されていることから、省略主題が「花子」であると判断が下される。強い語彙的結束力から省略主題が容易に再生されると言えるだろう。

(11)では、「欠席する」→「風邪をひく」→「寝込んでいる」への繋がりがごく自然に続いている。従って、「欠席した」の主語が引継ぎ続いて、「風邪を引いた」の主語になり、「寝込んでいる」の主語にもなっていくことに抵抗がない。矛盾がなくそれぞれの語彙が結束性を保ち、文どうしを結びつけている。

(8)の正解率の高さの理由として語句の繰り返しが考えられる。「～の部屋に入らなかった」「～の部屋に入った」と対照的な関係を示しつつ、同一語句の繰り返しにより第1文と第2文の結束力を高め、主語が同じであるという推測の支えとなっている。表層的に

は語句の繰り返しのより結束性を高め、意味においては対照によりまた結束力を強化していると言える。

最後にもっとも正解率が高かった(5)の例文について考えてみたい。これは、久野(1978)では「従属節の主語の省略」に分類される例文であり、一見すると構文的には易しい質問文には見えない。しかし意味に関しては、「病気である」ことと「学校を休む」こととの関係が緊密であり、やはり結束性が強い。したがって従属節(第1文)の省略主題が主文(第2文)の主題と同一であることが意味から容易に理解されるのであろう。

いままでとりあげた、高い正解率をもつ質問文の共通点は、第1に複文でも二つの文からなる談話にしても、それぞれの2文どうしの意味の結束性が強いことである。まとめると、

- | | |
|-------------------------|------------------|
| (1) 上着を脱ぐ → 掛ける | (時の継続による連鎖) |
| (2) 上着を脱いで → 掛ける | (時の継続による連鎖) |
| (15) 花子 → (女性) → きれいになる | (意味の近接による連鎖) |
| (11) 欠席 → (風邪) → 寝込む | (意味の近接による連鎖) |
| (8) 部屋に入らなかった → 部屋に入った | (同一語句の反復による連鎖) |
| (5) 病気 → 学校を休む | (意味の近接(因果)による連鎖) |

となる。正解率70%台の質問文と比較すると、以上の質問文の結束性の強さが明らかである。例えば正解率72%の(13)を考えてみよう。

(13) 太郎が僕に自転車を貸してくれた。お礼に、[φ] 夕食をごちそうした。

「自転車を貸す」ことと、「夕食をごちそうする」ことは語彙的連鎖がなく、意味の結束性が弱い。また、正解率76%の(10)を考えてみよう。

(10) 太郎が訪ねてきた。[φ] すっかり大人ぼくなっていた。

「～が訪ねてきた」と「大人ぼくなっている」も意味的な結束がほとんどない。結束性に関していえば、正解率が高いほど、質問文の二文がより強い結束力をもっていると解釈できるのではないだろうか。

第2の共通点は、接続度、視点補助動詞のような統語解析を必要とする質問文が含まれていないことである。複雑な統語解析を必要とせず、かつ結束性の強い質問文において、外国人は高い正解率をあげていると言える。

4. ま と め

省略主題の再生と密接にかかわるものとして、接続法、視点補助動詞、結束性の順に考察してきた。接続法に関して言えば、「と」接続の正解率をもっとも低い。また視点補助動詞を含む省略文の正解率も低い。したがって、統語解析の影響が強い質問文において正解率が低いと言える。しかし、統語解析の影響を直接受けない質問文の正解率が高い。又正解率が高いほど、文どうしの結束性が強い。結束性は意味によって成立することから、外国人日本語学習者は省略主題再生の手段としてより意味に依存した判断を下していると思われる。

それに対して日本人が省略主題を再生する場合にはまず、構文法に基づく統語解析をお

こない、その後結束性により再生の支えとして意味解析をしていると思われる。単語理解を加え、以上述べたことをまとめると次の様になる。

〔主題省略の再生メカニズム〕

		{接統法・視点補助動詞} {結束性}		
日本人	主題省略文⇒	単語理解 ⇒	統語解析 ⇒	意味解析 ⇒省略主題の再生
外国人	主題省略文⇒	単語理解 →	(統語解析) →	意味解析 ⇒省略主題の再生

外国人がより日本人に近い省略主題再生力をつけてゆくには統語解析にかかわる構文的知識と主題省略の関係を理解する必要があると言えるのではないだろうか。

(注)

- 1) 筑波大学留学生教育センターの協力を得、調査を実施した。① 留学生 50 名 (それぞれの母語—中国語: 26 名, タイ語: 6 名, 韓国語: 7 名, スペイン語: 4 名, ポルトガル語: 1 名, 英語: 4 名, インドネシア語: 1 名, ベルガン語: 1 名) ② 1988 年 10 月 14 日実施。
- 2) 日本人への調査での指示, 例文は外国人へのものと同一。質問文数は同一ではないが外国人に対して使用したものはすべて含んでいる。① 筑波大学大学生 48 名 (男子 32 名, 女子 16 名), ② 1988 年 9 月 27 日実施。
- 3) 「結束性」に関しての定義は R. de ボウブランド (1984) に従った。彼は「結束性」を「意義の連続性」として定義し, 表層面上の統語法による文法を「結束構造」として区別している。

参考文献

池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所
 神尾昭雄 (1985) 「談話における視点」『日本語学』4-12
 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
 ——— (1978) 『談話の文法』大修館書店
 三上 章 (1970) 『文法小論集』くろしお出版
 R. de ボウブランド (1984) 『テキスト言語学入門』紀伊国屋書店

(長岡技術科学大学講師)